京式部日記抄

二

紫式部日記抄二の巻

紅葉ちらくなりぬとて、よろづうちをんよく つろこかせ給ふ世におとゝ
ろき菓の枝をたつまいてはくてまゐるいろくうつろひたるとさかるゝ
えところあるとさ角くにうゑたてたるをあはきうすき濃ふ見えたた
るはけふおんもしろきめへきこうちすゝに

紅葉のとのちにえとなりぬせにおそろきハ世中に濃ふすゑれてはも
しろさとうゑなりうゑたてたるをのをいかゝにをの張りなる角へ
し老と思きめへきハさ角くおそろき菓の花乃めてたさに年の老
たるをとゝ忘ゝこゝろちすとなりけふとは陶淵明の詩に酒能祛百慮
菊為制頽齢をたづゝ申たちゝ紅人乃色をわするとふ菓ハめとせを

あ風ふかぜのうりけ。[illegible]誤あり。今何酒抄にえた風によ風なよんでこゝ水をうけていへ
こなるへ〜

斜

なぜや酒〜てたそふとのすこ〜をなのあなる対なる酒〜うは。すきくしく
をめてなし。ろやをてつまなくに世ををとすくして酒〜めてたきとおを〜
ろさことをえきくにつけてをたくたもひらけたゝ〜ん入ひくるぬきつよ
くてもおくく。おさをほふなけろ〜きことのさるろいとくろ〜き
こしなう自のうへをゝ入りなぜやはナニトテなう酒〜ていまほうてゆて。せ汎
人ふまほうて物品しの多さをいふなう。師ろくなたとてきほうてゆの品ふ
ろをとゝいてその品ふことのすこ〜をきとつふろし品ふとつふ河を上下ふ
たつふきゝうをたうこの格古文に伽ありといふふう。すきくしい物すに

もぶちでなゝにして。ちきずにこのむとをゝ入ゝ品ひらけたゝ〜ん。佛
そに。ほくおもひうたゝ〜ん。なゝ。おにもうつ〜んをはひきたゝへたゝ〜
へゝくよろつをすゝ。にをろそあ。あ〜しき後にもき。粉よにしたゝひぬ風ん
なとそく。なとゝ同〜ん。きゝ。ゆてゝは通せせんなとのんなゝへ〜。さんそきん
れ引ろこのゝつよくてめてたきこと。たゝ〜ろきことを又文につけてもそのう
くとなう。をのうくい物をつうけにてんのすきぬをいふ。おをきゝふ。おを
ひよゝになう

いそい酒をなほ物をれ〜ん品ひひもな〜。つゝとふゝうをとあけたて
はうちなうめて水をゝとゝれおをふゝとなけにおゝひあゝをゝ風
水ををゝろうゝとやよゝにえん桟をうゝたゝ世をすくして

ふしもちろんをやりてあるふとゆしと分はいとくるしうなりとれゆひよ
ばりて風

いそばナニドゾシテドウゾシテとゆふ意にて形容なり品ひろひなし品
（とも品ふふまうせさふしそなりつきよふうゝ仏菩に品ひろけなりゝ於
世中の物ほひにうつゝふをゆ（うあけたてそ明きそとふをつく
いる酒なりゝ水をさ佛えくゝろおんのさこにそ深く仏菩を品ひなり
うを（は品ふとなけふもてなして世を過していたくく風ゝとゆふ意なり
つそゆたくらしとゆふ意こゆしうさるゝに次の詞ふうしも分いれとる
しうなりとは此風なりうゝ死たる世とはんの意ととるうきの品ふと
なけふもてつけてわる世をいうといそふうこれ奇子我集冬部

しらにとていまうゝふしもは水をさたんをすてい拙ひなく十分な
るさ酒をいふおひようゝふふうゝさうゝ水をれうへ佛てにお
ものよ数ゝるとなり

小少の雪の降れこせたる色をうくに的あれはとうゝくせはつゝひもいきく
又色は染しうとうちさわきてなんとそこしをゆたることやゝ紅をせたりけ
んゝゝゝなりにたにだちふりいたりたりたりたることせんしに　濃染紙
雲なくなるもうををゝくくゝいふーのるふふしなるん
ゝくるんもれほにに
ことわりれ三ゝ乃宇は雲なあしとなるる袖をゝわく酒ゆれき
はをゝくゝにのはゝ的面の与なり又宇のけーゝもをなんい佛の文の詞の文む

祢の名をうゝくうきよしる文なり。とゝまれたりこゝをれたるとは自のおな
なれは早下ーて山ゐなれと使のいはくにようてとゝみにようるなれいろくれ一所
なり。こゝをれとゝふと後ふ妻しくいて。たちうちいこの五ゐを云てやう
て又ぶかゐの許よりこの名をたこせたるなり。ゐこゝをれたるとゝある名の
ゐーなるゝしうにめたるい紙のをれ注のうなるなり。さて雪なくゝ所云く
をのあれ水なる言れ今きにもたほさ此云ひになるあうちにわゝんれわ
きくゝせいうるをういんあつる友まとおれなゝてうそなうきをめ筆あさひ
しく云たちを添くこひしのふにがあるのゐに雪なれくうれくゝていい
それはなにをこひしのふることなんといつる名なり。といそれたりこれなゝ彩
勅撰集冬部にさをにれて的面しける白紫式部に至しける上東門院小

少ゐとそれまゝ。れつゝんとこれは文句をれへるなり。ちて家にこしをれ
たるとやうれたをなりんとゐこれ文句をゐくれ注めきていへるは所ゝと
うきとむ帰さ注ゐるとをなれそかゝ。たゐうれきゝ初句はダウリニカナヒタル
ノよりゝ云をゝ。しゐれはふれさ所たきをのなれそなゝ。ゐそのを通ゐか
所ひたる的面れをはふれを所たさ小て雪ゐあれと我のく君をれゐひて
をゐゐ袖を道理にをたうひてをそよれくうくゐ所をなきとゐうゐひ
さよんへるをゝ。袖のうをゐあい所なるとゐとうをゝこのをのを云のゐれ面
ーとて。搭白うくうとをれをうとて同集にいれり
袖の白あゝゝしくはくれなるゐ所なるゐ祢とゐ注ーよせさせて四説にあゝ又けきし
ゆれいけうをちゐゐをれゝれて。あさやうにう所をー

龍鷄音

枕の月とは上に行幸ちかくなりぬとてとあるへつゞけるなりされどこゝにては文の
つゞきたがひたるやうなれども猶さきにあるに、まづ文のおもむきにしたがひて其の
すぢをとき一段ごとに文をわかちて書かせる文法なり次度ともに
三月まつのあそびの程にみえ散てはいとゞにほひておもしろき、と
まづきこえて猶いまだおもしろき詣をぬきつることをなげくとみえたると同じことなり。
後にもあそびを詣ことをのりきてこれ猶いたしよせさせて此説に係れり。
あらはげきしゆへ湖月抄に「鷁文作艦淮南子龍舟鷁首」註高誘
云「鷁水鳥也畫其象著船首以禦水患」云々 細流に鷁は水を
ふせぐものなり詣は風をさへてよく行くものなればかくなとしるした
る深き意ありてかくもとよそあるゝ竜頭鷁首ならしするなり

行幸はたつのときとまだあかつきより人々まちしんつるひに
この行幸は十月十六日なり日本紀略寛弘五年十月十六日癸卯天皇行
幸中宮御所上東門第以第二皇子為親王左大臣以下於南廷拝
舞とみえたり百錬抄も同じ
かんだちめ殿ばらにしれたるなれはこなたはいまのやうにさうらうとかう
に内侍のかんのとのはとふさに中宮の御ぐしなどもまゐらすとて近く侍
ふときこゆ
こなたは八中宮の御方なり中とは八絵所なくこなたは八侍のやうにより給に内
侍従度は中と清うしとして言なりといへれどもされと此さにとあるを見
ればこれ行幸に中宮の御方へ渡らせ給ふ内侍督の御方にたちてこの御方に

もて清らていとうつくしきの人殊ふといふ人し清うに清うしきなりうちくえ
れは中々に清うしきと清うてとの人殊ふとふたつをかきなり
暁にかね君あり殊ありけるよしにうしらけつりなとに
このかね君は則ち小かね君と同人にやさしくふさし脱なるか肖けるかにもかう
ね君とのこ此る家をあり又師えては暁小かね君とあらしいをふにうつ
し隠れるなるへし家のうちちよく似るにあるうさ小かね君といひてよ紀と
ころなりといふをれならを思ふに里より中宮の四方に参れるなりけらけら
るは髪をとくなり
まれのさいふとも目たけなんとたゆきんよりはたゆたひてあふきのいとなほく
しぬをまた人ふれひたるもてこなんとまちぬなるにはそれおとをきてつけてん

扱くさまかるさまあらしき
上の衣袖をかけてまんのさやうにいふより手なとは日たるなとひのよの
なりといひあへるなりたゆみはブシャウなりなほくしはナンデモナイにてよ
此つまの扇なるすに畢かしてれへるなるへしまといはすなりもてこなんは
もてよろしなりさてこの衣をとりすへていそくふれ隠けかまれし
たる扇を人ふかまていひつけおきたるしをり手ちらくなりたるにとれまで
もてぬをまつをひていそとくもてよろしとまちぬなるすをらく肖きて
色けるにや給本衣はまといまさきのきを脱せるか又とふにかとよりの扇のれと
なほくしきれふ又よろしきのを人ふいひつけおきしとの意かといはれたり
つえれれとは紹宴の楽の鼓の器なり西宮記の行幸の條に雅楽寮候

路邊奏樂とゝたてたり。おきまる。奥方へなり。そのあるて。いるきてまる
る女房とゝたさ所のあーとなり。あーきのきい衍り。所にまるの下にその
を脱せるなり。文のき所。法ある人さなるといえれて
れこしむ人ある。ふなりくいとれをーろーよるをえれはちよちやうれ法方
れ程なるーむーりのほるていとく所ーけふつふーまるなにのとくなる
たるき所ーらいと。身のほとりをるあるにいとやすけをしーらしとえる
よにる。衍要をれ階のすとになり。ーまりのほるていい階より昇りて序要
を昇するるなるり。なにのはナシ。アとふにて。茶にるーけをにと
もりなんとりるなり。をーいなにりを語れるりとくなるいとくーきな
り。身のほとはら仮ゆて。宴位をふこれあたりの文の忘いとくーれを位

宮女のく所ーきまらいと。身のく仮のるりみるにこれ鶯要すとと
乃さるいやーき身のほとはりりるする所さ所のくーけかやにけをーとえ
るとなり。又おとふになにのきいなにのことくなるたるき所ーられそとを。
れとり。ともなるたるき所ーらいときよふ。ゑかりく宥きてりきて。とく
なるきとふとを二ふまりりをたなる也　ふる鬱平にる
れ桂のにーれきに北所ーをふつれて。これこれにーのひんりの所ふれい侍
ーをたてたるれり一りへたてひんりにあれなるきはかいこをれつまに
こにをりげ人きてが府れれた所事れをーらをとり。すたきをすこ引
あけて。内位二人れつ。北のれれるきあげり所そーきするたりゑををりー
けふれたるやりなり

あれたるいあしはなる宮をいとなをしつゝ酒ハこなをうなたゝお書へるところをん
へり内侍二人は次小弓をなる二人なり髪あけのこと書に出て うゝ石い深紅
女袴をりゝ
たゝ表つのなんしれそうしるゝあをいろれむをんのうゝきぬ赤濃裳領巾裙すはこのこひまこん
帯 淳線 綾 たんはふぜんをようをそうたんに指るうゝきは菊きくれ皆練ゝ名袴りゝくれ
なかずるつきゝをたしいさうをつれて天神うゝうゝめそをやうにきよけなり
まを以下左表つ内侍のよ絶ほひなり領巾裙帯侍中の所書に見たり
り名まりハ淡色袴指にうほきくれなゐのきぬの袴うきをいふとあり
つれて天神ハよ行うたそしうきうれてこゆるなり
矢内侍は宮しれそこ紅小文ひ指めれたりとおうちきようゝきぬはさに

れかれなしどとをさやうにをりけなる人れつ酒しけふすをしつみたる指ん
ゝるうゝ見をけるあふきようそしめてこれを酒したりとこゆひまはあふちたん 棟 綾
神めれやうにはよこよひのたつほとよ紙をほひむうしあ酒ゝたりゝんをとあこれ
ずゝをもうゝやあうゝんと酒てれほ神
宮しハ金なり弓まにそ剱金とよに指ふつきれとなり紅小下矢内侍
れさ酒なりゝ宮にそ左表つ内侍の裳庵衣に同如となりさやゝうちひ
されなりゝてみたるハて酒しけふめそなたさ酒なりゝんゝるしはキドクナとい
ふゝゝんこのそ酒したりハ時をたるしさ酒の稼の人のようハ酒ようたるよしなり
神めれ下十五字解うたしうゝれたりれををへしむうしを浄
庚原天皇紀吉野宴にれそし酒ゝに神女天降て舞ををれなし

こと様風俗なとにもさやうのことたるをならひて心かゝりけるによりあ
流をは今せにもいかなる流をもとあまたあれとも皆ともにたゝぬとなり
されとたとしく流跡なと引そくりあらてにもあらんなん　内侍はのぼ
りし数々になし　さ此のにのぼりし数か年ともになし
を奉つるさいとつきくしこすさしてれてし此とくをならてなふいとまうく
し次ッ中ねれそうしなとよりて内侍につたふ
を奉つるさハ左京府の官人なりつきくし出にいつまうくしハまうめくを
とのまうと同しく武官の事此きひしくとりわてなふさ内をいふ又延
喜近衛式に凡供奉行幸大将以下少将以上（幸遠著摺衣幸近臨時處分）並著
皂綾横刀弓箭行騰草鞋（幸近除行騰著靴）将監以下府生以上並著皂
綾布衫白布帯横刀弓箭行騰麻鞋（幸近以蒲脛巾代行騰）近衛皂綾青
摺布衫白布帯横刀弓箭蒲脛巾麻鞋云々とみえたるこれ装
束のさまをまうくしといふ脈えくてそらつしあやまりてまうくしと
つかへしとおもちゐひたりしを奉つるさかまうくしこすさしてはし此
をならてまうくしといへるはあれにともそれなりける此れそうし中におを
えたると同し序叙なり楚れを次中ねなる人とりて左京の内侍奉つるまへ
たるなりされとうちては文の次第たるひたるやうなれともしうれまに左京の内
侍れそうしとるといへるは序叙をとりたる家のさまをくはしくいはんとてな
づけるなりさて立まう後法の次第を心得ての文法なることおにかゝること
し

えにの中をゑたせは名ゆゑされたる人をは まんのあをいろあをれろのこう
きぬに地すり氏震うはぎいはれたしてすきうれたり物をうたう酒
の中ねそ えひきうをきて作らしうちまれよはこたらにきよみちをこ
たきせたるすりにて中ケ添きぬとも まんのうちなしれこきうにきし
苑 をんいろうあやき業をそは三をとんこなり 文子 業
これて禁きをゆゑされたる上腸のふを入へり
あやゆゑされぬはまんのれとなくしきいむうんのあをきをしはすたうなと
れ襲 ふてうきとはれあやなり 大海 はたとのすとのれのきをなや
うにあさくとてこしとをいうたんをそ 腰 級イ 固文 はたそしたうちれいきうれ
三へ入へにて作ねいせに

水のきい大海を物なる地の汚れのそなりあきくい減そなりこれをて
あやゆゑされぬれとれくしき女房をきき酒なり
うたに人は業の色のうう衣をんにしたらうへは白くあをきうへをは
すうう一へはあをきうとあううへうくうつきくうれすうう中に白き酒
せたるよすへて赤き酒をうーきのそうとくしうえ中ゆいい三にめつ
ーうれとうくーきあーきよそゆ
白きをせたうとあうと殺をいまてんはへーきてこれをて若き女房よ
のさ酒なれとすへてきは上の上腸うれれくしきと若きと意に
そなりて此うとくしいんのおれにかーこけを添をうおとうくし
はギャウヲンナとうこうをなり

うちとけたる打ちまぜ、をほなるぬうたちをうちゐしてゐてゐるれ、人を
はるゝてつくろひゐたるし、たとしたる法、如意のをうしきにれと
ようにて、とし比ほの、ものとをびいとうをきまちめうみのすゝれたるへなるけ
しれをさはうれてこちたきるをうをへいうゝをたさ所
をうれゐれの下にうくゝ所をうきれにてよゝ旅しなてた所のすにぱをし
こちたきうれて下にさ所くなれとれまてゐをへしおとうへなるけしれいたと
なびうをうたさうゝうこちたきいをきるなうゝうをへい武彩の月のあるて
あ所をつとひたる如方とれ老長のけちめと桟をへいうゝをゐゝて秘
とほきいとをえうれすとなるけちめはかりメなるをほこちたきあに
へり

さてはあるきようゝれひたひつきれあやしく人のうたちをきをくしく
とゝたてもをてなにをところなの所
さてけサウミテいあてきれようれてをれそとゝをなうあゝきようをを
いとあて所を寂あて掩ひたるきれよう上つゝれ額つさとつゝをなうあ
やしくは奇妙ニかゝりをなくしくをを玲本寂をくきをくしとゝ所ゝ
きさ所ゝたりてをとゝいをゝゝらなゝ二めをゝしにてあゝゝあてをたをといを
あてなしにとをゝう所をゝ不束掩寂をにいとをををれたりゝれを裝束
にををゝをきゝかゝを所のゝ人ゆゝををつゝといれたゝ
う所中にすゝれたをとゝ人ゆゝうれをゝうれをゝれ
ゝゝ所くなる中にすゝれてをとゝ人ゆゝうれをゝうれをゝ如なゝゝめをゝ

うきてよりこれ北の方、文にうけてさふらふ人は、主殿つとひてきてふなん
し二人、余所にあたりれをうなひのの人ひとり
うへの女房、おにはのぢんに車あらせあるとうはうへ人とおなりげると
ゆるとゆく内裏北の方をつかさと内裏北の方をあるを仕をと
あるを文にうけてさふらふとうかがいまてうりまの海うけに
こにをあるつとひてさふらふなり。　文ぞ書とに
花をのをあるとしちくせんたふのおをとのかをあげて内侍のぶてるすこれを
しらをとよりいづこれをよろしきを天かなり
そるは往来するなり天女とは繁上たるすることをうに天にあたて
れ夜風たをふなりまるしきいおの根にを保をにたいがんをとふ

ほとのをなり濃文に可とて山ろろをとりとえをたり
たふ糸はあをいろふやなにのむをんのうへ衣ちくせんは蒙の女北うへ衣裳は
まんのすをなりれをうなひ橘三位あをんろをうきぬうへあをれきなる
蒙北うちきをうをきなめ風ーをとあげなりをらかをなて酒ほにを
ぞをに
ーをとあげなりは簾を風へしをらかふれは粧にをへられなる酒なり。蒙
やにあをいろのうへきぬはとるるはるめ
度をうをいたきまうをひて花をへにいををうをへいたきうーをまーを
ををへ法とはをうをを法へはけをるはをとをうーを。秋宰相衣裳はをうーをとをて
り法へう

花えんの節ハ此ものなり。うへといふ事をかきあらはすなり。不時用しさしたる
しるにいうちれうへとかきあるへきことなれを省きて書るなり。さうしにたく
をさなきほとをかきこのころ此書にさうし上ハ。今とかし賣なり。その
れさうしハ若衆の女酒へしる
せやれ中ようにしふとのうへれたらたる紙ゑ文はれそしまを注し
うへとにそさせ注ひてき宰れ君はてはきにうていとけそうにもしたな
きそちしつるとけふれもそうちあるみてか注へる。ア注て酒うにをうしけな
り。家れをとへうけふさきゑし注へり
毋屋ハ屋のうちにもとあるをいう。宰れ君ハ夫の兄宰れなり。け
せういあるそなる事なり。もしたなくいうにいづけやとハ或紙うんに宰れ

家の面うちあるをてうひしけなを理なりとをつうへなひて出るなり。人全
りけふハうう酒まうしなり。きそやしい家の君をてを君酒のようふまて
義さうしたるをいう
くれ申くあ酒にかくとといとたうしろ。上をアれをへにさうくい注へ一ア君ら
く。太平樂賀殿かてんなとつふをひとちやうけんを酒うて音声にあ注へい
て。ふのされのこちをまへほとこ注くなり申く酒にふえの音を注みのふ
とを松風をこふくく吹あて注へいとおをしろ
賀殿を長慶子とよにに樂の名なり酒ンて音声い樂に参入音声
退出音声（くわて）といとつるし。饒源抄ハ名なり。委しきとい樂家にと
へし。ふは。庭中れ築山なり。こふくい水を注へ多ふくさ酒なり

いとよくちらしすみたるやり水そへてちゆきたるをしきして池の水なとたちさ
わきおもしろさむきにうへの所あきめたるふたつまり渡へりけり久家令婦
そのおのかさむかめ氣色かいとほしうきこえさほかを人はしきいてこ
らよ
池の水に流さちさるくをみて老の水よりふのりあやをえてちゆき
たるけしきなりとみゆやまさき流をかく此氣なり おもしろさむきは浦とハ
さしをさむかぬをこれあたりそへきによほさふしてさむきをいふ事
り渡りハおんさせ渡りといへるをしいをほしろいハ帝これらをいをほし
かりまるなり しの山にてナイセウデなり 渡りけりて爰ヤにいる
ちくせん此令婦は古院の（圓融院）むすめしかるとしこれ度のり事はいとなひくあ

ましとおりかきおりかきなとみいそいはむ申しきことをありぬ
へかめりをしらかしとてことふあへたはにに九丁へたてて本紙なめりあそれ
いかなりかんなとなふはる人あはたちこほしつへきあま
古院のこと女房とにいふ詞なり圓融院は六十四代の帝なり申しき
ことらと聞しきうたよていまきしきことをてへらうかしらはキブシ
ワルイといふそらしちくせんの令婦の方ろうをするほとにい浦そりき
よそすそミにけをいいま式部のんしらひしてよろくしき處ふまてなりて
さらに恥をもせぬなり九丁へたてていちくせんと式部とのやるなり浦らに
さらへしきさ府にまてなせるなりあそれはほは申しあそれそのほといかな
さへなとなりよい人あいは申しきことも何もくのうなくいふへきさ府

なりとなり。うちこほにいおをうちこほしふたとしていはなり

れ示れあはひをしはりていとたそーろきにわうえのれうふうつくうきこ

元輔上者のれと方れらくれ戸にあひてなんきこゆるとめてまーしきこ

（顕光公 詞）

元輔上有集のうえなと方れらく。お秋示と。まろ戸ゑにすーしてあるー

（公任卿）

（道長公 詞）

れおほへ度あそれさらくのり事をなとしれほくあると思ふへくん

うをけるこゆうるおをとるひなれしふーなこをれとれうう

らとれにーるーいとあてたくれ

ゆ戸にあひとと八表文のゆ戸のうつくーきに。るゑ樂のあひてきこゆ

となーと。ふ表示ゑいれたりなとていなにとてなー。あそれきいこたひの

り事にゆへうへていされくのハはーとあるーをとふゑしふいこた

ひ。ゆ戸れそ〳〵に。ゆるまへ。れ。ふ。ふへるをふれり事なれさしれほく

ハ。面目のまゆをなるるゆにゆるなー。ゆいなれハ。辞人乃。拙に悉ー

て。ふをゆうり。係ゆ拙にあまとゑるる。ゆいなれハ。辞人乃。拙に悉ー

四位下文室朝臣秋津卒云々監督非遠。蓋是其人也。点論

武藝。足称驍将。但在飲酒席。似非大夫。每至酒三四杯。必有

醉泣之癖。故也。なとゑたり。さるとゆにくけくといとさーな

ルそとゆるとゆ。今さるーゆにゆるとゆ及そぬとれとゆふゑしめて。ゆ

ーよ。ゆにとゆうにゆたーとゆるに。ゆ。ゆれりゆのゆたーけなさ

を。度のゆうるとれほーゆたれんを。悉ーまるなー

度は。あゆるとれゆしさゆ。ゆうへは。ゆるゆ。ゆるゆ。ゆるゆ。ゆ

てとうしかき給ふ事つきさせ殿の家司(ケイシ)のさるへきかきり加階す頭弁(通方)して あ
ないは奏せさせ給ふめり
いふせ給ひてハ君にうへとにせきせ給ひてとあるを尾なり此君にめして
の下に作りし御におほせをらせて召すへし事つきさせ侍従に宰相卿
とのたまひとこそは中宮の官人とつへき官なれは一人かいつきろへうにと殿の
家司ハ道長公の家人なりさるへきかきりハそのひと子息誕の官のとに
労ある人をえらひなり加階ハ位をますことなりあないハことはして頭弁
して労ある人を誰々と案内し奏へさせて叙しめしおかせ給ひしと
あたらしき宮のよろこびうちれ上達ア ひきつれて拝し奉り給
ふ藤原なからもかとわかれたるハ列にもたち給ハさりけり

あたらしき宮のよろこびとハ君にてせる日本記略の文に以第二皇
子為親王とあるをいふ後には文の日宮の家司別当なと人なと職さた
まりけるとあるたりうちれ上達アハ氏の上達アにて道長公のうか
らなる藤原氏の人をなり藤原なからとハ不比等公の男子四人を四
にわけて南家北家式家京家と名つけてこれ道長公は房前公の流
にて北家なれは余の三家ハ同し氏なからも門わかれたるハこれつらに
ハたち給ハさりとなり
次に別当になりたる右衛門督(齊信卿) 大宮の大夫(皇太后宮公任卿) よ宮の亮(源経頼) 加階したる侍従宰相(實成卿)
つき／＼の人舞踏す
右衛門督の侍従にハ同人として宰相とにて さうハ右衛門ハ中宮を兼ねさる故へし これによりてハ

右衛門督兼中宮大夫にてこたひ別当になりなさるゝは（みこの家の別当なるへし）
斉信公任の二人とも別当になりたまひしかとおもに宮の大夫庁の家司のうちよりさう
ちうけ給はれとそれそれは蔵人なりしかは大夫は中宮の亮のなるへし宮の
すけてこれも蔵人の侍従は実成として侍従宰相同人とするによるへし侍従宰相兼
中宮権亮（権亮なるよしはまへにいへり）也て宮の三位亮ななるへし（宮の三位のすけと見えはならひ実成をなれるもて）此文は中宮
権亮にて労ありしによりてかく侍するとて侍従宰相は職とてそのまゝ経頼実成二人として
は定まりし程和泉式部に次ぎて当になり給ふ宮大夫右兵衛督権中納言権亮侍従
宰相をかく侍し給ひて家司に見えなりにたれは大夫の大い行なるへし又権亮の
ことに見えたる職なるは三人定めてめしたる家司はかく侍せんまるて御事に位階で
宮此れかさにゆるせ給ひて禄をたまはりふけぬれにしよれと訳しれた

いてさせ給ひぬ又のあしたか内の使ひあさきりをもみえぬにまゐれりくちや
すくすくしてみえになりにけり
宮は中宮なり帝にこそ此方にわたらせ給ひしあしたは帝よりよ
ろこひに置きまよはしまるき給なり又のあしたは翌朝なり内の使つか
ひは帝の使なり朝霧をもみえぬにといへるくまさりとおもへりくちやに
ことは式部の心うらみとありを後宮御使のまゐれ給ふをえさ給ひ
いふ程そしめし給ひまゐらせ給ふ
この御前の夜はまたしふけぬのほとにかつてんおほへし中宮の御産後そし
めし帝に給ひまゐらせ給ふれたともされと又のあしたさと以ひとしはやく
かけるはまさりかしく文のつかひしたるやうなれとこの御書き給ふ前にもありて

をとに妻しくんへりさしは次の夜に又のよをまつ人をや
おとゝ[illegible]にり世ぞちとし又の日宮の家司別当なと人なと藏さた酒
をくり[illegible]てもさそ祝ことにはほう
[illegible]宮の女人のこゝはさのかゝたれそなりさし
ハ〻人妻文は家司ともの但愛しなるなり　れなと人あそ[illegible]に作り
ふ人をいてたゞ人とは家司をいふなり　しちゝ親王家司に侍従（ナキトヒト）あるまれ藏
は藏掌なり　[illegible]とハ作者ハ某と入藏掌とうもてさたらなる
ハかつけていふへきとのなるへうをにそなる家をもて云きそ[illegible]
[illegible]くもしとあをを祝ことにしなへし　藏所にて所
ひとろれ[illegible]つひまなくにやつきなをあうなるて[illegible]家にあり酒

いとあ[illegible]酒ほ[illegible]
はにそれ妻の酒とをうこれほとををいあ酒ほ[illegible]あ酒ほしきはをに
なれうとうをなり
をとろふをくををまり酒ひけるはとのうちあへてあけたをは座うへをを
を酒ひてををう[illegible]つをきをを酒ふをほひいをんことなり
ふををくハ所まれをう酒さを[illegible]ほとをなるをまうハ遠長をと倫をを
うろをとなく祝をに品[illegible]めをよをなりはるにたひ所誕生ハ宮をにて
をれをう[illegible]をいうちあひてとなるををへハ倫をを中ほしををう[illegible]つをきは
宮をををなるみをひを宮をまのれを酒なる新のにほひをのふほひなとん
へ流これ月に見へなるなり今をきハ郊かうにたつやなるを見う　まに

にほひとめてとおもふと申しきこゆ
くれて月のおもしろきに。宮のすけ（源経頼）。女房にあひてとりもちたらよろこひを
けいせさせんと宮あそんつ局とのたりを御申とのくけすひにぬれ。人のおもむ
せさりけれは。これをたとのくひかし。此つまなる。宮のまへし。此つほねにたち
よりてたく（詞）にやとあそはし給ふ
宮のすけ。おなしく侍従の局にしたれとこれを啓すにいへるとく。實成々
な源へし。とりもちなるよろこひハたほけさ局なりぬとたくしのカクベツテイ子
イナルれ礼とのよろこひにて啓に見てなるかなのよろこひなり。御申とのはくハつま
此侍従局なり
（経房卿）宰相は。中此まによりて。局ささてぬかくしれかみたしあけて（詞）たきにやなとあ
れといてぬに宮のおくにやとの給ふにさへ宰ておのまんとさとくしきをな
れはあるなれは人なとれ。いとおもふことなけな宰御宰しれとなり
さぬいふらしのけるまなるへし。いてぬにといふらんれと女房とものいりて
あるこそぬなり。宮のまへ経の人いとまれかうまれ中宮大夫斉信人の御心ふ
にかれさへ知てあのまんまとくし。知らせまれはあらなきにいふことなり
とくしはモウタイラとキなりけらは知らへ人はサウトシタルヘンジなりかやうとな
けなるいふれしたるての人々の御知なり。経房なとも中宮にも此大臣あるに
や考ふへし。さぬ宰による
我れらは人いせしれ宮をはんとにまてをし。さても常とうなまならをろし。て源
家に上らりのけちめはならいかくらのうとあそはし給ふ

昔、我世の人々、世にふるもののうとからぬを、なほ、のの細とすべし。されば、
ふる雨のなほ、ぬるゝがごとの細いかなるこゝろよりしるべきなり。清志
文仏にさせたまへるとて、みさごゆのしたに、ほそ〳〵とかきたるみ
ちの、さそこゝろかゝるこゝろしとは、中なかなれいんとにもてなれそ
逆程なりとあるうちに、ほとゝぎすつかさしるべきなる風をこゝろしとへ風
なり。こゝ風雨にまとい次の歌に、いとくゝもたらねれわかるゝとい
いなゝうたゝれたしとゆるをれいかゝるをいさくうや
をひろしこみたる海のゆにはしこゝ風ものけなる雨にて、上らゝ下らゝ
ぬけちめゝくいるくをのうとあるべかるべしあるはサミスル
にて、雨ゝをもぬるゝなるをあるべかるゝ。されど又、上にあいゆ文

あまをさして、上らゝとの経へるに長さ〳〵いあはあいつかさ〳〵するゆゝなるをと
ろしとしてあるべかるゝ

ゝふのたふとさなとこゝ忘をうゝうなる上、最ふる海に月をあらしがしの
ゝとどろきけよとせあ経へとゝをゝたゝてゝもちめれわかるゝんもれといひなる
らゝゝゝさしわやゝれるゝ人ゝ我、まれ紅ゝあゝにあゝたるとゝつみ
申風されなたかあされを海しとは長はをゝさに

ゝふのたふとさ、俗馬楽吉の歌なり。侍ゆの歌書にえゆがゝしれそとハ
下にて上にかゝしれそみれしあけてとゝに金てゝるゝしさけよハ避よにそと
りのけよれ京ゝゝ下よにるハ誤ゝなゝめ経へといそゆさに係れゝいと
ゆ下とゝるれたぬゝを釈するなゝうさゝゝしいゆにゝゝそゝていそこ

乃局の下にうたをよみて、石とは、たゝ一所なる石をいへり。あ
さは、淺きにうつゝやほきさ所をもとゝなり。まそつを由うさるゝの下に
我らくさだすきまれなるほとゝいふをいはんとしなにゝなにう
さそあるへきとて、こゝろをうと、結句義いまはしてあされは、シヤレテなれ〳〵しく
する心なり。　あされそ由し一本による

れいちは、霜月のはれたちれ日、まゝの人〻れ出たるてのほりつとひなる此茶の
ありさ由、後にうたなるおあそせの茶にそひとよりにて作りし

いちは、児せ水して、五十日にあさ水日のよなり、河海抄に五十日或百日、供
餅事也、天暦四年八月五日儲君降誕之後當百日依世俗例供
御餅、云々、花を餅情にて誕生ゆちあ十日をはいちとゝいふ百日をはいちとゝ

とゝふ、云々、儀式ありて、餅をそなへ、うつほ物語、藤原
忠雅、なとにそなへ物あそい、餅合、絵合なとのたくひなり、さ
ゝれ物合あり

四丁ゆ、ふのたをゝれさそにきちをれをゝれをゝ曹司ひさしゆそ
しらまをしひとをゝをゝをにたをゝて、事れをそにれをまれ物はあり、す
ゝをり

たをゝれきそにい序、定の陰ふをてとんはへ、花への物いは茶に作つへき
折ゝれ物なり

にゝにをゝて、牡丹、沉、臺、れをれのをゝれのをゝれ、なにゝれのたんなりんゝし
そなるゝれとはえにれ由なりい、宰れ君さあをとゝつゝお房をゝれゝしをと

ゆひなとしたり

おほ宮東三條殿家司にて侍女なりけれはかの院にて東三條院と申ほとにかの人は皇太后宮なりなにくれのはな
ミヤカヤノとゝふ名をしたれしとゆひしたる所あり此儀式のをうな
ほしはゝ髪あけたるさまなり

さうそくのれ所なりなひは大納言ひんうにようてよりすゑたりちひさきれいだ
いれさうとれさうのだんすそ所なとよひくなあるひのくとうゆ様ほうひ
んうしたまのひはしにすこしあけて弁内侍中務命婦か中務表なとさ
ゝいさきとりつきてをるたにかてくそうい兄侍ゝにたよひか浦れ
めれとそゆるしたりそしきさう所うちしたり若宮
倫子
とのうへゝさたうつしあるをひて おさりいてさせたりほりれさ所まは

ひとにめてたしあるいろのゝ〳〵れ袴ちりすれ裳うはそくさう袴れ袴
一所ゝたしけなとあそ小に足伊大宮ハ元びそめれ色れ袴ゝすゝれれ
こうちきを小り

さゝれいさうこきのゝを着さて号便にいるなりお殿れめのとい宮に大臣宮つのれ
もとゝさ義人女のめれとゝある外れ今一人れれ乳母なりゝ名伊さるとい禁
名を穂さしたるなりそしいふこしにてゆうゝきなりゝたしけなくは
オソレオホイモワタイナイとゝふ名をしあそ小にの下にそし脱るゝと給本義れ
そ小ゝり

度もちひそまりゝ侍ふんゝちめの度ハまれろひしれたのにれもてなりい
右大臣顕光内大臣公季
所ふたゝところれ大臣をまりゝ侍りそれうにまりてまたゝひたれて

注し申侍し

よちひい五十日に儀式に餅にて若宮にまゐ侍し給へ。まんのとい侍る音

に三日の夜にとゝしいとり。　大臣と。数年にて

をろひつ物。こまにとゝと。屋の内をよろ所うち君たちとりつてさてまわしるこう

うらんにつけて。すゑたしたりたち火あり。に光りにんとなゝ小ぶ伝か

ねなとをよひよせて。紙燭　数くさせて人とはゝる

ことの河海抄に。筵をゝて。菓子を。菓を入て。本の枝或に松に付

なゝとつゝたり。折櫃と。筵物とにれ五十日の食籠をいとまれなり。

ほうち云ふ公に云て。天皇の庚午にさゝふ云ふことにて。后たち

にとゝ。ほうちいおつの号。便に就るなり。とゝに古事。就傳に云たり。

云ふ。ずゝたしたる。折櫃物。筵物なとを云ふし。　ことのよ。数年にて

たちあゝ。年たきあゝとに

うちのだんぞん不にもとゝなるへきにあたらいは物とゝ。これい数記

てとゝゝゝひて。文のたいふ。にのすとにまわりて。上を。后アにたゝにめさんとけん

し浄へきこしめしつとあ小。屋よりゝしめりてとなる酒わり侍ふ。そし記

ひんゝ。記つ酒とゝ。酒てか侍て

うちハ内裏なゝ。この食籠を内裏記。盤不に物てまるハ。そこ記人

人とゝ侍さんとなるへしるを明ゝハ物とゝなるにゝてとゝ。を物と

もをまつとゝゝゝひて。もとゝなわしるなゝ。初宮さに内のたんぞん不にもてま

ほゝへきにあたらハ物ゝとゝ。これもとゝまわるぬとゝゝゝ。とゝゝゝひ

いつきとぬかりよ袖をいかてんはへし袖くさい朋月扶に袖くさとふふ惜の袖
しきとなとある所袖忘とふ字を書て簾なとにつけてあるきなとせて
つしむとなりとそなりとそのものたろうなとい河海扶にくさこのころ
注書にいとあまたそなることなりこれのもとい中宮の御しきに簾のもと
なりきこしめしつい中宮のきこしめしいはきを注ひてめにすへされは
人をおもにをりて注ふしさをい赤にて簾を注なりなのそしい深度な
との物なへしい初花さにそしらの赤の袖をとにて赤のつとの主袖
てゐ注りとあるをそれそはしらを注れるにや　まるへさにのにそ歌
中宮とにをきい脱なるなり
女房ふたへさいてゐるされたりこれとを扶の袖小あるてゐ注る人さ

よりつきそれあけ注小実物を表宇れ表こ少物表文内行とゐ注り
扶の袖小あなりてきハたとへさ東の間にあるりてゐなる人をい赤の間に簾
をあげ扶の間にあるりてゐる人をは西の間をあるるをいふ
顕光公
右の花とぞるて五年に注ほろびひさなちこれ注ふさたすぎなりとつ
きしろふを宇にあふさをとりたそふれとるそたなきを花ろう大夫 齊信卿
うつけとりて扶をなふそ注りこれようたひて西の扶ひさ袖さりな
りといとにをしろ
ほろびそほろぞうなる本をいふひきなちい引断なくきなきい人
の齢に盛りすぎなるをいふつしろふい女房ものなりあふきをとり
ハ女房とに注庭なへしこれ大臣の盛りすきて袖ひ注りにあ袖りに

花をなしうゝぬたゝ永し清をきたなし点つなり簑山ハ信濃乐
旨の奇なり三代目に花ひらるゝ山とよのあうにあふたの
さや あふたのしさや とうたふなり
・實資卿
袂のつきの面のひんうのさらすに衣太ゆるて衣のつ面神ちうゝ
注ゝくゝき人ゝとなり 恋ひのききれをあなつゝきこえ又たきうとい
なと思ひ行てきるゝとをてに いうくさいをあく人ゝとゝげふゝ
花をすゝかめル
衣のつゝ神ちい苔に如唐ゝ三つ ゝたきれゝ ゝ如唐ゝ
袂ゝ袂ひなる衣のつゝ神になり又たルゝとハなとこの袂ゝ
ゝいていゝたルゝふゝ人をあくきなと思ひ行てとゝ言ゝさしとさ

ゝにてハとゝ はゝゝたし 所ハたルゝとゝのとハ袂ゝ ハ術なゝ省きてよく
きゝ元あてハ文句ゝのえに又後本箱ハたまゝとハなゝ人ゝ簑の平な
ルハ 袂ゝとハ言ゝ 思ひ行てとゝとゝ思ルなり いつれにも人を
袂酔ルなるをあをつゝきゝなゝ袂ゝとゝに ルゝつきゝ ゝしく
さルゝきあく人ゝとこの去ハ袂ゝとゝに花ゝく 捨れ袂ゝ とい
ふ云なり さルゝ袂ゝと同く ゝヤルなり ゝをめくはつウりウがルなり げふ
ハあに人ゝとゝはゝとゝと同く 捨りたゝとゝとゝ 傳ゝ 酒めくはゝ
白ゝ なるハたゝう人ゝとゝにゝ 白なり
ゝゝつきゝ袂ゝ人ゝのゝを ゝハは袂ゝ 袂ゝ とゝ ゝルのゝとゝ百代
にてすゝぬ

詞 されば然にて答を綴しける御文をひろくうけてよめるなりげんに今のよ
巡盃なり 其ち給ふは上戸なるぬなるべし ともかくもいふことなかるべし なりゆき
前万代は祝ひの席にうたふ奇なるべし 巡盃乃まはるをまんのもなかなりし
此祝ひの奇にて手びろしし給ふなり
公任卿 詞 左衛門督あなりしこ此のことなりに若むらさきやさふらふとうかひ給ふ源氏
にかゝるべき人見えて給はぬにかの上はまして聞きてをのし給へんと覚ゆる
あなりしことはアナカシコオホイとよむ言にてとまたをされなり 若むらさきとはこの
式部を紫上になして云ふたるされの給ふなり さてこの式部をむらさきと云
ひしと河海抄袋草子に記してあるを兵して云の不揃にくそしうるて
さて一條帝此君の中ちりのまれなり おそれと相得しめせよまさせ給ひし

とゆる記ふつきて扶れをよしといふ見れなきとだしうでまれになりてなることもな
ちに式部の母一條帝のれ乳母なりしを又お隠れつなれはこの記も相記し
あてなるへくや考へつるに今かくてに若紫とし其の給ふにつきてせよにえ
河海抄に紫上此をとすゝめて記そてなされに右式部の名をあらためて
紫式部と号せられたりとゆる記をまうなりもうされよひさ海の妾し
かう称はうけひらぬ人多あれとれのれえこのうさにんひろくにつきて相そをし
妾しくゆへし給ふの源氏君のあひ侍りし人ゝのそれほとき中にうちり
よなくおもほしめしなるはこの紫上になりし人なく若紫と書にこれ君の名
さなにはほとより書ぞしめてうせ給ふをりきてまことにこの君の他を燃て
かとぞうぬ生たく又この君のうたちんさへをそしめよろつなにひとつあうぬ

不なるときはそすくれ給るさ侍なと。れ法しまに。源や物語つ新の中に。この
元にたれ人を以て人とせなく。世ふ世中北女のほんとも。まさきはあるさ侍
をそしめきりをそしきてつきに紅葉なと。他の人ふくへていずてなに
ともいとくこれしまるに。曲の人ことをいとくめてれのつう。
て此歌を。最後の縁もあれは。むしさとはよしなりと。侍しくて
にてこなる文にまておのれいうをなん。思風まて。源や以下。歌のれ中の詞にて。
源氏いろうう。位物語や物語なりしこうさんはうたをふれこたりハしき
人とうへ。名なりうのうへとい。紫上の四となり。侍ての名便にて。紫上
ハうまれ給る。此宮此。うるこなりハしきあるうにて侍てなにとて。内給
さんの。名なり。うる。紫家也。論にも。むの根にもにるとてなるハ。名なあて

に。つ給。れふれは。源や。は。書の名にてあるて。光源氏。君を。以なり。
源氏。不をうにうつ。儀物にて。にるへきとあるをいとなしてにる
へて。ふれハ。こ。儀をあとつ。このこつ。君をうへ。ハ。新ひ。詞もよく
なをへう。源氏を。書の名をしていうをは。源や。物語に。こをなる。れ法なる
人。此中にて。こなりうハしきたこれ。れ。以うへ。れ。れてなりと
いれ。て。此。紫家。書の名を。源氏。とのこいふハ。今世。此俗。にて。れ。
といれなり

三位のすけうそうけ。れなとあるに。俗。行成。雪れ。公季公。たちて。内のれそのれそすれ。
ふさようこたるをなて。れとこれひなれ。一。法人
三位をい。井くうの。法人なる。人。この。井くハ。弱光の。井くなる。人。一。ふに。宰長。
なをあう

のたまはれ給ふ。さて三位のすけ、伊勢宰相は兄弟にて、同じ人心
傾かれそれにおそるべく行成々々なれど、なほ実成宰相を
流へしとぞ、世人皆肩の責に堪へず、あるとりまのをりに伊勢宰
相と物と実成々々なるへくて、ものに出るうち、世はのあれの責にも出る
をうへしさて実成は宮仕の所子なれば、父大臣のれて下部ふらて下よ
りそたなりでは、しとさ酒なへ、彼光大臣のなめにて浮世なり。ひ
なし浮人なれは、所父の忠義公叔父のそ、ぞ、ひろうとそれ大臣に
れそ中にをろ実成々のいとく伊勢宰相はうにてれそすをそて注
注ふなへ

藤信卿
柱中納言すみの酒のそらすとにうて、去秋のれそとひこしろひそにそれ

たまふれて名と度のさまにに
ひこしろひは引ハりアフにて去秋のれそとおを引ハりアフなへのさま
まにハ制し注まあなへ
れそろしるハさ来のれ名ひなめしとえて、ことまる酒小宰ハ君にれひあハ
こそ、ふれなんと注にひんうれそにとのきんたう宰相中将なといつて
さそうしけまにはやろうさうなへのうしろふねうれたをとうそうそを注
ひてやりなへ、ふうへするをさを注へりさうひとうてはうは酒つれそうはゆ
るさんとの注をにいとそくれそろしれはきこゆ
いうにれうなへやうへさやちとせのあ酒りひさしき君うさうをは
あをれつうまれふれと注うひさうすをさを注ひていうの注をせた

流

あしたつの毛をそひしーあれハ若の代のちをすのにかよふこゝとうてん
さはりをもひ逢てをあちにをれほしげるをあなれはいとあれかこ
とうなり

れをうしるをハ辞へ係りいとく辞逢る者の若ろしきほとなら
をいとことをつるハをを水の後式のをつるなりとうちををハ流れなれ物を
道長公のとくのけさを逢ほくとくへず名い通さーとうへて物をにおき
逢ほくるハ歌ふて名のいをひの寄しさて初白はナニシドウシテと
いふ意にてつらくいる詞なりやちををハ弥千森にて流りなれ意なり
ハ流りなき孫子森のあはりに久しなれ若意のり末の序代いろをへん

とすれとも十二シドウシテうを逢へやうをきをといふ意にてり末を祝ひ奉る
なり又初白に百十のををきいはうとを逢不羅いれうこの寄後をを集賀
祝にいまりあそれをを意のをれを道長公はほめ逢るなりとうハ疾の字便
にて道長公のやをををつうをを逢るなりさて初白のあしたつハ和名
抄に唐韻云鶴音零揚氏抄云多豆今按倭俗謂鶴為二菖鶴一是也鶴別名也と見てたく鶴とを
寄れ意はれをを森を逢とハ鶴の齢乃ある身なれは末なくなうへ
てこれ安れあ森へ逢をん牧ををう逢へとうてんとの逢ふなりいうく意ハ逢
つるれをちにをををほううに白を逢ハきことなりされとこの寄初れをに
も後拾遺集に見たるも二の白白をひしあくはとあるこれに白ハ我身
あしたつの齢れある身なハ意の代のあ森の牧をう逢へとうてんと心るにて

いうてあしたつれ歯さあかうしと祈ひ法ふ意こもれり。次の花信しげることの
さ面なれはと思るを忘一はおくへのうさ面にて攻ゆ。されとはソレホドなり。
花ほしげることの面なれをとい。高氏ゆとふきの。ぬ交意の面なれそとゝ意
なり。されとあぬそのうたふらくはてうとあるへきとく思しめしけるこ
とのあるあ面なりたくいい法ひたるとも攻ゆいとあそれにとろうなり
といさゆこに忘しめしたるれあうさ面をえて。イツソ感こゑ〈テオダウリナリと
思るなり。この歌にうてをあぬいれるさまはれり。いとそしくゆにより
法本宗教ハれとそしたなくにていあしくしうとそれうう。初花ゆにいとそひし
うなをろしくれをとるをたんたり
けふうくゆてきゆしさこえ法ふにをいうつれうさうを面さしを法ふめれ

ふ代もあえ面しくはゆくすあれうになしぬあちにたふおよひてけるる
けふというくゆて。ゆ法ふを誘なひて思るなり。うさうをはいさしさ大臣
れゆてきゆしさこえ法ふにつけて百氏車拙乃それにうきれて揚ることゝ
あえ面しくはアヤカリタクなられり宋い若文乃なり。になしぬ式新ろ
ろうしれうへなり思ひてけるいれり宋氏めてたるうき四さ面氏今ろり
思ひつけらるなり

盛長詠
文のたをへきこしゆにやつろう面つれうと我ほめし法ひて文の世てにて面ろ
ろうしに面ろのむすめゆて文をろくたそしまたをきを面されをありと
思ひて。わしひ法ふめりられをとはゆたうしとれゆひためりとたをふ
れきこえ法ふさおろれきれ乃面されなうとえゆ。ざることなけれ

はさうーさうちはしれのしめてたくのこさてゐさせ法ふ

うう紀文は中文なり きこしめにやいはうつくしき紀のことなり つう

酒つれりいかくなる作りとつほとの高し 桟ほぬい自讃なり ては又

なりうつほ抽竹萬安にとあり 又景花抽竹 衣紀陳ぞに大又を花ほてこと

もなくう酒ろがは オレガとつふほとの詞なり そは中文紀れ抽にて倫子

乃四とくうこひ法ふめりいは逆長ぢだらたそ山れとの法ふをそて笑ひ

法ふをえんえひあると思ーてうこひ法ふなんと思をーての法ふも又

たそふれなりえ男はいうつ紀となり 但し今ひ美男紀宗ふはの

にはすうはもちてあるをつめて巻るなりこれきはかべつなり さるとは然

有事(ルコト)にて方にあるーとをつふれなれはなけれをとふとてゐは巻うき

ひてはそこんきれ砕まきれ乃たをふれてく不毋れとだれたをふれと紀き

にてこうろふきとをなけれそとふ意にもや 牧わさ巻なり に師はさる

とをれはとあるーをうつし法れるなりおそうの法にしうふきとろを

きこをなけれそとんひてはやけに巻ぬとなりとうきれたりきわ是法

ふ序方これなり

とのうへきにくーとたほほ巻や上たくせ法ひぬるけーこなれそ(行)たくせほと

てそうくみ法をんもれ巻とていはきこれ紀れうちをとほくせ法ふ文(行)な

めーとたほすーん巻紀あれはこを巻とうーこけまとうちつふやき法

ふを人とはあくひきこゆ

きてくーは逆長紀戯文巻をなくこくせハそこをうちてあれ巻なくは

ゐりせにさとい倫子おなじ〳〵源氏を送り迎へにハ服を着せん
とて中文れたそ〳〵まれ九丁社内を西〳〵せ法〳〵なり〳〵まるに中文
れなり〳〵とおほせ〳〵んとなり〳〵これを程たまれなり〳〵なめしはブレイナブ
サホウナとふ意なり〳〵はやのきこ子とふをの親乃ゐ〳〵つくにより中文
なとにもたせ法ふなれは親申忌にて社ゐ〳〵こけまとなり〳〵これゐ〳〵ここき
もオンレオホイなとのゐ〳〵ここきにて序分れやむとなくなるをゐ〳〵つふく
ハ今ゐふと同〳〵さて上にれいゐハ書月のつゐさち社日とゐゐゐりこれをてれよ
十日社ゐゐ乃さ法なり
〳〵せ法ふつきこともちゐゐなりぬれと人こいうちつきて〳〵んのとゐなり〳〵ぬに
れこ〳〵にそれゐゐ〳〵つゐゐいとなませ法ふとそあけたてはまつむゐひさふ〳〵

ひてゐこれゐこ〳〵えりとこの〳〵てもれゐゐれほんとゐゐゐてとゐゐくにふ
ふゐきくゐゐゐうはとちあつめ忘たゐをやくゐてゐゐ〳〵ゐ〳〵に
〳〵せ法ふふきこと中文内書になりぬれとのとれさう〳〵つゐうきへ係りの
とゐなり〳〵ぬにのぬにハむゐひさふ〳〵ひて〳〵係れりれれとゐふにぬれとのとい
ゐを誤れるなへ〳〵とそとたゐひに誤れることゐれの書にをつまなほに
うちつきハれ是れ程れ文十ゐれとなとゐゐうち徒なりれさう〳〵いた
たれゐなり拾ゐゐゐう〳〵めを法ん書につゐ〳〵せ法ふなりむゐひさ
ふ〳〵ひて〳〵中文の四男になり〳〵れゐゐれほんとゐゐゐて〳〵つゐ〳〵せ法
ふれ草子にゐ〳〵てなり〳〵ふゐこれゐるゐ文にをゐ〳〵ゐて〳〵人をにゐゐうあ
てゐ〳〵むゐなり〳〵くゐるハくゐゐ〳〵なへ〳〵と紙本箱いれたりやくにてハ

そこはかとこの沢つとめにしてそなたなり。さてこに見たるもれくろう、采
死物狂烟後、に物狂合せ。このとおのう鉄拾ひの考とつよ
ハ人こんかまうせてつられるなり。とつやともそなてむう
ゆるへ〜。又こに見たるかさうしの妻〜き考へハ松の高樂に見たり
なにのこもちつめこたにこるとちいきせ後やときこそ後ふもれくう〜らに
うにやうともふてすみなとせてをめり後ひてはすりをきへもてをめり後
一ハはと〜せ後るをやこ〜ふし〜ヨて。もれ〜くにはにむうひさうひてこる
ヨはしハつとさんなむなしとらくさすみふてなと後をせたり
なにのこ。逆長公記中文に中後ふ物なり。つめたき。今ひと同し。桃草を
にさそ中。ヨるヨはハさうし。仮ちとなり。拙ろ〜ハ拙なり〜れ。ものうに

やうハ。我なり。とせ後ふるハ中。ヨれくとふ。ふなり。もれくはふ。ヨ師。ヨく。
もれくはハ。ヨ後ふなり。如房とちむうひてヨるふたるあなさう〜れとろさ
をそなせて。こるヨはし。ハつとひひてヨるをれなむなしとらくさすこ
多なとなせたれはせんくなくらこ〜とふこるなうといれれうされ
とれしりてれひにふとるやたちたるものはうげなり。れなむはセツカン
スルなり。　こもち。新中による
つはきに物ろうれやとようにやりてらくしたきたるを山おにあるほとふや
をうたきはしておうせ後ひてこれなれ〜れちんの屋にまう後ひてけり。
らろ〜ろうくうたるしいこなひて。ひさう〜なひて。んとなれ名をろとう物
りえんう〜

つぼをよいかくしたきたなへ係れりとにやりて我里亭へなるへしはるのに
ゑい中文はるにあるあひたふなりやをゝはソツトなりたをゝ俗ていい
道長なれなりあるい物を捜し索むることをいふこれころは書に見た
俗ゑれさる云なり一説集に求食とるけらいかるまあるとゝ俗ゑれひとつにつて書る文へ今世し内伝寛慶い妍まなり
芋に見ゝるゝ見ゝるゝゑい見ゝるゝなへなをゝ物語いゑれ外へいきう
しなひてゝらゝしゝゝぬゝれこゝれるをまり語いたれはゑとなゝ居をゝ
とゝ俗ゝんゝゝ俗をいれてゝいはへゝこにえゝるいゑれをつゝゝつくれ
る物語なへゝ とにやりて歌ゞ平にる
ゝゝ文はれゝるゝなとをさせ語ふゝちにゑとなくたほゝめにとゝるな
りゝゝ

はれゝるゝ若ホまに匂ゑれれるのれみすれ本にゆゝしさまてゝゝるゝゝうつく
ゝうてたやゝにれ語ゝうちゑを語るとゝるゝてゝれゝ今いとをゝ居さ児の
れゝふとくなるをカタルとゝるゝれを出るなゝゝるつまのたとなれれゝるゝ
とは変なゝうちい内裏にて帝をヤまれゝ
はれ茶れ池に水ゝるとゝれ日ゝにれほくなゝゆゝくをゝるゝいゝゝ世語をぬさゝ弥雪
ゝゝゝんゝこれれなへ乃あるゝさ俗いゝにをゝゝうゝんと点ふにあるゝゝ俗ふま
ゝて学るほと二日ゝゝあまてゝを雪をふ俗もれゝ
いゝ世語をぬい中文内裏になゝ雪ふゝゝんいふれゝゝと歌ふゝれ泥へ
これれおゝへて庭ゑなゝをゝうゝんと点ふにの下にゝゝてとゝふ物をれ
れゝてゝるへゝしあるゝゝさ俗いゝゝるめなゝ俗そなるい我里亭へなゝ二日い

うりあつてしもいんそし雪ふるしとあれふほといふこゝて我足おりて二
月ハうりあつてちやにふとふ言なりしとふ詞あやにふあさしり
雪いふるまれハフルホトシクイタクフレリとふ言なり。松の房紫にたとろきあ
やしむをにハいりと又て
たこれ程数は大後に元方或アヤ元うゐこゐけの君にて松をすゝころ
えらとの此庚申をさせ給ふにこれ或アヤをゆ給てさゝなり九条後さ
ゝをせ給ひて人くあをきさふゝひてごうなせ給ふつ世に冷泉流のは
らをふ松をゐこゐなるほとあてさゝぬたゝひといくとれもひやなるに九条
後こらひのすぐろくつゝうゐつんとれほせゝをゐこゐれさゝゐ此給へ
るみこをとゝれをにくはてうゐやそこてうなせ給ひけるにたゝ一とにい
てゝるまれありとある人めを見ハしてうんしまをやゝ給ひろれこつ

ゝをいみしとれほしなりけ流にとゆると回し程智をう大後か流もいて
きたるほふたゝふいてきたりとふ言なり秋下に雪をけらんしておう
しゐ酒そなるをいみしくにくをせ給ふとゝ人をの給ふとを見ゝう
雪ゆゝなん新中軍にたゝ流
見とゝろをなれ字ほとの歌をうちをゝるにをあむつのうれをひをたれてゝ
ゝろつれくになるあゝゝゝ花をれをを称をを春秋に申紀
うふをれ寄ゝを月の新家雪をゝて我の時をにけをとはゝ年ひ
をれゝ

見とゝろをなれをは中家れなゝのれあうを酒ふむゝて我里亭れを酒を
此原心ゐ和ゐうゝうは山サクサとてんれを酒ぬをんふなるハ和ゐひ

されあるをうれしがりて、ををさえ事をとさてと、ゆきいれてんぱへ、ゆ
をよう雲雨をまて、変れさ面もうくさしかもたて四季おりつりかうさ面を、
文章にかくれ人風なりさしかと、春秋に伸びるとこれつるにたのつうう、変ものこと
ゆりまて、雲雨をうてれえに、空れて、ゆ、月れ新をこれうてひとつに
こめて、ゆり、ゆの的きてけりとそうい的をるれをにて、ゆをうし
よもおそれゆるゆそにとなるはこつうれ拙れをひうあ風れなうへしそ
れさ面流くにこゆ

いうにやいのにとそうゆらすれんゆ拙さはやうるなれもれうう、そうなれ拙
ううなとにつけてうちちたうふ人れなし、あそれにうきうし、ずこ
一章とゆきたうとをたつまてをいけるをたくこれをき面くにあへ

しられ拙ゆうるとにつゆくをはなくさあく世にあ風つき人かにとそれをそれな
うふ、しあたりてをつうゆきしとゆ拙うるうはうれなるしをは
もれこせるこれくれれゆしる対れうされ

いうにやいのにそいうなうんくとりまをあやふむんなうやうるそれいんほ
拙くやふんれ考こ方れなれなうるなきゆ拙うるそれにしてふあ拙へ
うれふしい文をたれふとうやうする風へすこし家とゆきうきい同しんなる
人中は、家まうきあうう面てよ、後りを弱まていれやりりとなうこれをは
同しんなる人をれいあしらふはいキョクモテナスなう拙うるとは、分けりり
ツモナイコトにてあれるるたれううなとをしい世にあるさうきいつうれ
う一を、早下しそれ一風ゆてれうれたるし一係りりまうしい拙んにまうし

とゝ〳〵といふ〳〵もとすちにかゞべつなることゝさうにてつゝゐひ風のたゝ
うりにてはつゝにて男衆まてのうれたつゝをとなうちはさゞウモアとん
ふほとの衆なうにてこせることなくいうにてとゝいしきをいとうをにてこさにう
衆なうにてをいしきいをうにてとゝいしきとを我牙にひきうげてなう
ひろゝにはゝうをとうてえしをもえしやうにをれほゝにあさ海ーくあそれ
なゝ〳〵人にたゝたゝひしあうと我きんにはなくんあさゝうのとおもひ
にてをいうんとにてをうにはれをへいとをうゝうてえにてとつれゝ〳〵に
うにはゝをはゝ書なうきにひいうはきゝいにはやとんゝにとうてゝにを
とゝをはにをゝうゝをうにえしゝやうにはあゝにとなうあさ海ーくあは
にをなゝいはをれにをゝ海にはすうれたるをんゝあさ海ゝとおをにとふたつ

にをあゝにいうにをサゾをうゝにをなくいはを集に暮相而朝面無美隠尓
カロヤとあ海いにをとあてをうゝくを面目なきを衣に出りをこの沢に書につ
うひたるいをのをつうゝくを面目なきさ海なるをなにとをひたゝくあるをん
ひ又たゝオシノツヨイといふ衣ふをひひてウラノカハノアツイとつゝをゝこはつきゝく衣にうつれ
風をサ出れ和歌にうにををすて海さ出ひけるうをにはなをなきことをいそちを
すつとはいひけるとえさて四中六秀うこにはゝ和歌の解に注反義も大きこをう
にはゝをはうにをこの外中字にはゝ書とにをゝたるをえ合をて出風へゝ我をいう
にをこを出ひにをすゝんといは今は中衣を仕にをにてうひてあれはをふはうう
とえあゝてにをのつうゝあさ海ゝくあそれなるゝ人にたゝひゝあうゝもう
とゝゝくなうたるをあなうにはゝうにをなくんあさきをにとをひにをにうう

人といふなるへし。されさいむうしあさ酒しくあそれに思ひしひとりさて。
これあるうちう。次の段にて男との別を惜るやうにもなれたれとすてこれ
は花のうちにつくれすきう酒きとたてそえたるとなく。れうれ人も酒さ
とうふうたなうをけふと吹たはれ花をとうれをなるへし
んにくうんと思ひたる人はたほそうそは文やちすんなとうたそえ
うあれはいそうは我んれうちあるさ酒をもふうれしそうんとおとも
りにてれとあんをれそ中たゆとなけをとおのつうあ酒さうれそ中ゆる
ずすちさまにたりとと思ひやりてれとれひる人とうたうなと
してまてそるをきとふふれてとあうぬ世にきたるあちはそにてし
もうちさう拙あそれをうけける

ふにくうんさ人は武ちうんにしう思ひたる人をうれたほそうはバツトし
なる云中今八里張されそ中ゆれ出京にのそ作人そ法うそうをそ
をそにていとはるそんにくうんされ人そんれうちれ安しさ酒な
とうれる文はバツトしたる独ゆにていそ文やちすんとうたはるへかめ
れはたのうう消息をとれをそ言れせあとありとう人言をめ恨え
八中たゆときうれをゆへ係れういてうそくタウシテなうちあるい奥ある
にて我身云ゆをとあをとにそいてふうれれそうんとあんをけれ
をナニトイフワケモナシニといふほとの言をう中をゆときいさはやうに中れ
たゆるてそあておのううあ酒くうれをゆるとあうと理をれてんるへし
されはさをうなは我方へすみつきさたをうたなるなんと思ひやりて

なりすみいおてはそは我を軽くしておろかきうふ女を恋をへしたほ
らを軽すむといふとは男に女乃許にあひすむにてすむとをすみつくとを恋る
つまにとなれハ男とのあるを恋るやうなれとおきさきにそある帰きとおに
恋りれとなれひるいれとつれ多るおてうにきたる人乃うちにもたるくをなひ
ある人なりうれをうたるすいはすみさたるになるたるうにろうハ今ハ宮つ
うにのこうつひてあるれをあるへしおに我をいかにれもなくんあさにとと
恋るをあらをもうひてあるへしうたるい勘書にておそヨセツケスしてあるをい
ふ宮にたこれをうあくにあしらひと恋るうるあ〳〵ぬせいあ〳〵ぬせう
れ乃うるしあにてしをハ年にすきなれ風我里亭にて汚へとふ宮んさて
上にいかにやいかと恋風うこれをて中宮を仕宮に宮れ如宮をのうへを

思ひ恋〳〵恋風なり次ふをたる恋を仕後宮に宮れをのうへなり　繁十四
とに　うに宮申るをあるとに　あそれなりけるに宮にうる
たるうるきたるうちうたるれすこしをんとをて行をふこ酒やうに物をれひうらふさ
しあるうてれのつう〳〵むつひうたる〳〵ふんそうすこしなつうくれをとふ物
もれそうなれや
えき〳〵にいをなれうたるそ者ふをとうにある人をて傷軍やをを仕へしす
こしをきハすこしなう〳〵を我んれと海ふうれ人をれふこ酒やうにきは
バウトセストクジツニ物を恋ひうらふ人なう〳〵あうていかとうむつ海き
にそあ〳〵称とおふしをふさあうてうたる〳〵ふ人なうさてうたるにうち
うたる〳〵ふ人んとうをて思ふ人いひうらふ人むつひうたる〳〵ふ人とにんにんをへしなや

うなる人のこゝをこそこゝろはなろうしくれそうなさやと出るにて哥
はゝ同じくゝなるあさ海しくあそれなるしんふくうゝんなと哥ふうゝへ
て今はゝはゝうなるをなろうしくゝふゝ拍子れしとなり
大納言こそれらるくはゝ堂へにいとちうふし接ひて拍子うし接ひし
まをひのこひしきとなほらにしたうひぬるんゝ
我里亭にて中宮の五宗れれを思ひさしたらなり なほらにうと哥
にうつしんをはひさたくたしへなくらろつまるにをうそあやしそ
又れをひうけなるしんそれひくうたのそつうてなと思て佛の道にふうく
思ひいりなるしんにもうく中宮宗れ宗のこひしそれなほ世上宗景観に
したうひぬる我んなとなり

うそれをせしゝ水のうへそれこそひしきそうそけふさえおくれとうぬ
初月は我里亭なゝ女中宮をまはのあひさんやはくゝ中とけてをえいをぬ
をほるるやうなるにたとそれ原へ二月の水のうへは初月の緑ふひろ水て
いつそれこなりさえはとエなりうそれ宗中宗れ宗にをまはして神ろる我の
五宗れこ恋しそて我里亭にていこの宗乃鴨乃上毛れさゆうはれとうに
さむさこうれとは風し次ふ逆しとあれはれ宗の五をを恋しくを思ひて
なる海にこのうらみて大納言宗につそをうなり

五一

うちそゝふとなそころれをさあてそつうひしをしをちはふこひしき
うそれさ海なとはいとをうしさをそほをれをほる人かれとうそ海

うちそゝふい鴛をしとゝ乃上毛にたく雲はたなびく詞にそゝるさまとゝ古注云
にそゝ物とれはしゝ二句い式ア紀里亭に近おくるほとなれい君をのなさ
らしをつゝひしい式アとふうあてしとなり鴛い式アにたとへたりさて
上毛の雲をうち拂ふへき友をなくなくころ紀寢覺はそふうあてし君
をこひしとゝふとなり紀さ物をとゝへそ式ら紀ゝなゝに文乃うち紀
さ物をとゝへをうしとなりそこ紀ほそ十分ナルなりまそこ紀ゝ云ゝとゝ彩勅
撰集に入ル
雲をれらんしてをうしを物そたるとをなんいとしくにく思せ給ふと
人ことを紀給へり
れらんしてい中文乃ゝ説してなりゝく書ゝりてをうしさ抔しと式ア紀

近おをにく物せ給ふとゝさそゝらを人ゝ紀せりおこ紀中にゝ紀ひたせ
たなり式ア大納云君乃近しと同ゝなゝへし
とゝをうゝ紀れせりおこにそゝろうとめしたひなれはことゝをうにゝ紀おき物
うてくとく物ゝんとあてしとそゝとあてほとふ物なゝりとゝ紀をせ
たまはたをれ出をさ咲て思給をせしことなれはうたしけなて物
ゝりぬ
清是とい文をとゝ口抔をもいふ師をくゝろうとめしたひなれいとゝをうにん
をきをうてくとうふていとうゝうゝ式アをうゝみ給ふ詞なりとく物ゝ
んとはをうる時ふ式ア紀いひし詞なるをの給ひしそ抔れをうゝ云にて
をゝとゝ紀ゝうゝ給ふ清是の文なりとんをれゝうとゝ物ゝそワザトなりされ

は式アうんに出たる赤ものとて、そうに仰〜事なれいうたしけなくみまひて、系し侍なく、さて笑ひきこゆなとはあなことをうやゆひていつ河なれい我らう上なる人中に初て拾なるをたにうゆるふすへさて拾にをたうひてひことなう、殆西家うく殆さもしに上にの文まれたちなるにてさの殆さもしなう、さもしいをを西京人うけたるなう、さの殆をを笑させとふ次にたうへるうう笑れとさることはあ風つきこと思りといをふう

いくを殆ふは十七日なう、いぬのとれなとをつれとやりく和ふけぬ

中宮内裏にのくを殆ふなう、日本記畧に、十一月十七日甲戌、中宮、入御内裏、本宮、設饗、饌屯食、ともをたり

ミなうみあけつかる人世ふ人世のほうにをををうにもやれひんうれを、

ひうしれひさしにうちれ如房を十ふ人ミなみのひさしれつ酒とへたてゆうり

世のほうにもあしふ殆をれれてあ酒ふれををうにとふ云なうへしう

ちれ如房いまれ内裏れ如房なうれ近へれたあなとにて系ふるなうへし

れこしにを文乃をんしれる

中宮れれ裏にあれといれとうれとをれいたうく倍従の宣旨をうう

をひて、をれ中宮と宣旨と出さしに乗り殆ふなう

いとけのれ車にとのうへ人お殆のめれとうを文ふをれまうてれる

倫子と若宮と乳母のお殆と三人系毛れ牛車なう

大納を宮お若こうをつくりに

これ二人ミカ子をつくりれ車なう

つきにたる酒にこかれ武内

これまた二人なり

つきにう酒の中れとたりたるをろろき人とおりたりと見たるしるしあ

をことくしとんとうろあうう酒むつうしうたゆい行うしう

これにて馬中れと式アとなりうろき人とは式アといむつ酒うゝぬ中に見又

見ふに昇木半にすうさ男と女ろろもれをうつにしれうこれとをの

こうなく見せつきんと見るうをいとほ一ふれとあるうろをれと同一くナて

ハンチャクモノをろろき人とおい一酒中やことくしはキツタイラシキなりされは

この馬中れをろろき人と見るは人をたとりめて物方を見ひあうたるう

なるをことくしとん一酒なり又やふにこれ式アいこれ次乃車なりに来るべき

ふ添なるをきれをうてちく馬中れと同車したるをことくしと見るやに

もきこゆれよ次ふしうふとうていしたんしまてとあれハ行さにてあし

う酒あうさ酒ハせ乃酒しらひをふむつうしうはれむつうしうとあにある

にれなし

よのうろうれ行ほ武内行次ふたれつのたんしとあてんしきふとうては

しだんしまとしつぎくはまんのんをにをのうける

よのうろうハ官名中し尚殿典殿ようちなるへしこれと武内行と同車なり次に

屋乃内行以下三人同車なりまてこれまてい方のほと笑しうゝぬ女房よりな

れを車に次乃をこしまてたるしくをうしをこれれ下次これは次乃をに

なくんとに乗りたるなりまんのハれつをうをうをうをるをうふ。 終

ふるさとのりけりとに

月はくもなくにふるみゝはるさやとれもひておしをはゝなくうら海の中わ君

をさにたなれは申ふをらにたゝくしきさ海ノ花我うゝろをろる人

さつゝくをゝ見しらるル

さそ内裏に申き君て車ゆりたて局まてうちあゆむほとなくい

みゝはるさや月はくもなきにかゝれなくろゝれんことをつみしのゝ法とれ

ゆふゝ君ををなくい為きて歩むさ海をゝたゝくしきいりさきたほ

つちなくゝ無内なる為ゝさるは馬ゆるいてく老る人なとにてそし

まにゝちて申くをゝふるにやさちゝくもい我うゝろて我ゝ海ゝろき

さ海の見ゝしらるてさつゝくなゝ

ほ御

ほとゝくゝこのくちにゝてふゝたまはゝこかれ君をれそてたほこ海ありさ

海のうゝとをゝうゝひてゝずくをなる衣をれゝやりあつあ衣るきゝを

てゝいとうにゝ火をうきゝれて身をひえにゝるゝもてをたなきをゝふに

ほをとゝくゝこのゝ花宴まにをゝて河海抜にゝかゝう弁三にあるゝ戸なゝと

なりあゝこのゝをゝ玉のゝ小櫛ゝ禁中なゝにとあるゝたゝりゝなほうゝをな

ほゝ中宮の四宮れゝすれて君をとなくゝをゝきゝ海なとゝ見をゝてあゝるゝにあ

なりてゝソレデモヤツハリとゝふゝゝ見ゝまゝくゝ中宮の俵性をゝうゝとにするゝ為を

ゝしをなゝへゝずくゝをゝたゝいあつあゝをなるれゝうゝにてゝあつあゝをなるゝ厚く肥なに

て絲ゝにほゝく入れてふゝくゝをなるをゝ見ゝりゝひえゝゝるゝとゝをゝきゝうゝてゝも絲を

ゝしたなゝさとゝをゝへゝゝ君に為ゝるれゝ姫君と同ゝ何ゝ海なゝ

行成卿源経房卿公信

行成宰相ん宰相中将きんのぶの中将などつぎつぎにらうきてよろづふと
いと中さなりおらひそなりにさとなれてやみをきやとたのもしくを人ぶ
ひきて語らるなるへし

行成宰相おこしを実成ひなるへし中さなりはかへりテメイワクしとうつこと
なりたすけをのやにうくを人をもとうひなりしたるはと御を入ぶそうそ
へ

し

いとあしたふまろ行くんからひそたへうく身をすきて行るなとことな
ひいたなこのちんれうきらうろ

あの人をに式部めつへする相なるいとあしたふはアサハヤウとうつこにて明彩
をいふまろ行くんいこれらうをなるに身をすきていはと言たす

なるかとなしひそコトナサヽウミなる陣い陣屋なるいづそこのにをそたる
にてこれ人をにあへらふをあむつうしくらいてなるへし　ひとなしい家
かつやにらる

たのうちいちと笑くをなにそうれはと人をはとらいたるるにる身に
らるをは行るに

ひさ三のにをそたらにうてうらい中文の流送りしありてとそて家流へ
いをきうるれあるかうて上んなるなにそうはドホがりとふこに
て人うになるぬもれをいふれをなにそさのうる家流へといをくとあるん
とうこ言ふ出るなるちとへと人い今里にうる人をいふ人をそのなるつけて
いうをなるいたるるいしらいていをきうる人乃うしろのうなる

らうこそなり。我身にもといとく家路にうをを人うになるぬもとすれ
いとなる我い人うにうの所しけまとさまにいあるに我さとらうなたそう
りれもれふとあるにとふ言ふまを今ふ所ふうさ所をそそふとかあれ君の
うちあそぬあるさ所をそいれ世て次わそらしを出て
大きれ世れあるさ所こかれ君れいとあてにをうけ出そらをうしと好い
しまてか注るをそ作るなうちそ君らうとそしまて人乃注とういれ
そいのこられくれそれ注てそあううし
大きの世のあるさ所いそ作るなへ係うしあるさ世写れあるさ所ずられてられ人
と。身れそれそいのさとなうれなとこのかれ君のしかくさてあるをそて世の
ゆうさまのさたのなるきおうとそそしれりとふ言ふあてにそ人さ所のたまとけ

なるをいふ父君いい旅人にいふと考へにされはとそ所ありてと出るとの何のら
しとるふるにれほたけふうこ所うをとある人う或そ人花きて身乃ちたな
とのいふいなうなたてれ父れにそる れ人うう れほとうい身れ書福
のたふれうと。
らへれれにそうれけさはこ所ふれ談ふれくしれをとうちれくとる以いつく
しそそんうたとなし
この所物れは中文内裏にいる世注いてやそ遠長らうあう注るれおく
りれなるへしらはれのにまきれ水を注いけるれにけさはきなしいいつくし
きといれ髪れ管れうちの綱度とれ祥さ所くなるうそはあてすくれた

ことをいとなりいたつるかはらのさしたるなれさしとも古今
後撰集拾遺抄はものはなどにつくりて行成丁時大弁宰相の中納言と延喜と
なのくさくしいとふにらんをあとてうせ給
ちろきちろしとはさくしいに稚う又をのきを紙を造りたる草にやさく
しいとちあそたるやなりそのかいは参りはて三集の言をうけてやなり拾
遺抄は勅撰なる拾遺集といふ実也古今風雅抄に大納言公任拾遺集
を抄して拾遺抄と名つけてとゆることなるへし はものぶといふ三集のとなり
さてさて歌をみ帖に造りたるは今はみ冊なり延喜は法師なるゆ僧
やに名伊行成々い紫式部の大納言とそとてそのうしろ今
と名たるし延喜も次ふ名をたる延喜ちうれふ次る曲のまうしなるへ

しさくしいとふいみ帖につくりたる二ちえ草にはらんをあとて
ちとい半紙の巻一冊乃やを草ものみ帖にあとてこの二人ふうせ給へ
りとなるへし はものふとのは数なる所にる
屏風しに羅しをたなしうちたるにはりうきてにはりうきてにはりうきて紙宣
元補 ものとすけ ちたいふしへいまのうたなみをたいふくれ集うたなり
表紙紙いつ水を草ものたに裝束なりたなる表紙乃羅と同さし羅
韓組紙紙なるへし紙宣は大中臣元補は清原氏なりの後撰集をう
いし梨壺にをの人乃中にて同時の人となりいみしへいまのとは元補は永祚
二年紙宣は正暦三年に卒てられたれそこの所をていみしへとふいま
にはこのころ乃言ふとをにたなり

えんりんと清原近澄ちりぼこの君とうたたらはさらあはにてこれさだ家ちうりもさつ
うを清之べき人しらぬまれきにしなきて清ゐい海めうりうさ海とな
さるまれ出はソレいソレミシテオイテとふ言ふてこれらう書たらいだれしに
それ乃まれなるらーなうこれんたいこの人をなうぬ級の人のうとなるにてさ
しもだんじなるぬをつぶされそ家ちうりつぼにもてつきを清ふへきれう
にせさを清ふなうつふいれうこの用にあるをて侍かに番とーなるハ勝
員なとせさを清ふんれうの言なういつれきとあ海へーえしらぬまれ
はゴナイショウノ物にーなきを清ふにて紙の人れえしらぬまれになうい
海めうりうきハ草まるまれーさ海なうきぶにれくーのそこれをとぬへう
らうこれまれ侍物のさ海なう